

平成23年度文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」

自然体験活動指導者養成事業 補助指導者養成研修会

～親子で体験活動にチャレンジ!～

参加者は、親子での体験活動に挑戦したことにより、その楽しさを実感するとともにその意義を理解することができました。そして、補助指導者として子どもの体験活動を支援する立場で活動しようとする意志を強く持ちました。

1. 事業実施までの経緯

子どもたちの豊かな心をはぐくみ、生きる力を身につけさせるために、青少年に対する体験活動の重要性が高まっている。平成19年には、教育再生会議の「社会総がかりで教育再生を―第二次報告書―」において「小学校で1週間の集団宿泊体験や自然体験・農林漁業体験の実施」が、また、「経済財政改革の基本方針2007」においても「小学校で1週間の自然体験の実施」が提言された。さらに、平成20年1月の中央教育審議会答申において、「体験活動は、学期中や長期休業期間中に一定期間（例えば1週間(5日間)程度）にわたって行うことにより、一層意義が深まるとともに、高い教育効果が得られる」と示され、平成20年3月に公示された新しい学習指導要領においても「体験活動の充実」が盛り込まれている。これらを受けて文部科学省は、「青少年体験活動総合プラン」で、指導者養成とプログラム開発に取り組んでいる。国立青少年教育振興機構の27施設をはじめとする指導者養成研修実施機関等では、文部科学省が制定した「指導者養成カリキュラム」に基づいた養成研修を実施しており、修了した方々を小学校等に紹介することとしている。今後より一層、学校教育現場に“体験活動の充実”と“長期にわたる体験活動の実践”が求められることから、各小学校で長期自然体験活動を実践する場合に必要な指導者の育成を目的とし、教員・社会教育関係者及び自然体験活動に興味・関心のある方を参加対象として、今回の養成研修会を実施することとなった。

当施設でも平成20年度から自然体験活動指導者養成研修会を毎年2回ずつ実施し、今年度で4回目となる。平成21年度まではカヌーや野外炊飯、炭焼き等、当所で普段行われている体験活動のプログラムを活用することで、指導者を養成してきた。しかし、参加者は青少年教育関係者や大学生が中心であり、新しい参加者層を開拓していくことが課題となっていた。そこで、昨年度は、例年参加者が多い親子事業からヒントを得て、3年生以上の小学生の保護者（親子同伴）を対象に補助指導者養成研修会を実施したところ、募集人数を超える参加者があった。

今年度は、昨年度の参加状況から、子どもの体験活動を支援する意志のある保護者が多いと判断し、昨年度同様の対象者に、補助指導者養成研修会を2回実施することにした。また、昨年度の反省を踏まえ、プログラム内容の精選や運営方法の工夫に重点を置き、事業を企画した。

2. ね ら い

さまざまな体験活動を経験することにより、その楽しさを実感するとともに、子どもとのふれあいや参加者相互のふれあいを通して、豊かな心を育む。

※「小学校長期自然体験活動」において実施される教育効果の高い自然体験・生活体験活動の補助を行う指導者養成を兼ねる。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4. 後 援 愛媛県教育委員会、愛媛県PTA連合会

5. 期 日 1回目 平成23年10月 8日(土)～10月 9日(日)
2回目 平成23年10月15日(土)～10月16日(日)

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家

7. 参加人数 1回目 保護者36名・小学生44名 合計80名
2回目 保護者36名・小学生41名 合計77名
(募集：3年生以上の小学生の保護者(親子同伴)各回28組)

8. 講 師 荒木俊夫氏(武蔵野市教育委員会教育部指導課教育アドバイザー)
松井康之氏(大洲市立河辺中学校校長)
宇和島山岳会
大洲市カヌー協会
国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

		9:30	10:00	11:00	12:30	14:00	17:20	19:00	20:00	21:00	22:30
1日目	10/8(土)	受付	開講式 施設説明 本事業の説明 アイスブレイク	大人	講義「学校教育 における体験 活動の意義」	昼食 休憩	実技指導 「カヌー (安全管 理)」	夕食 休憩	星空 観察	交流会	入浴 就寝
	子ども			なかまづくり ゲーム							
2日目	10/9(日)	起床	朝のつどい 朝食 準備 退所点検	大人	講義「教育課程 と体験活動の関 連性」	実技指導 「クライミング (安全管理)」	野外炊飯 (媛パークの井物) (みそ汁)	閉 講 式			
	子ども			自然観察	クライ ミング						
	10/16(日)										

※体験活動は、安全管理を含む。

10. 活動内容

【1日目】

「開講式・施設説明・本事業の説明・アイスブレイク」

最初に主催者である国立大洲青少年交流の家次長が挨拶を行った。その中で今回の事業が「小学校長期自然体験活動」において実施される教育効果の高い自然体験・生活体験活動の補助を行う指導者養成を兼ねているとの説明があった。

その後、国立大洲青少年交流の家職員による施設・本事業の説明があり、引き続き参加者の緊張をほぐすためにアイスブレイクを行った。



(保護者) 講義「学校教育における体験活動の意義」 荒木俊夫氏

学校教育における体験活動の必要性や意義、その指導者としての関わり方を、武蔵野市の長期宿泊体験活動（セカンドスクール）における実践をもとに、保護者を対象とした講義を行った。その中で、荒木氏は、いまの子どもたちは自然体験や様々な生活体験が不足していると指摘した。そして、武蔵野市の長期宿泊体験活動取材したテレビ番組を視聴し、現在までの経緯や指導體制、実施場所について、農山村での子どもたちの活動の様子や心情の変化、セカンドスクールにおける成果等の説明があった。その中で、指導者の子どもへのかかわり方やセカンドスクール等での補助指導者の役割、その必要性についての話があった。

(子ども)「なかまづくりゲーム」 国立大洲青少年交流の家職員

保護者が講義を受講している間、子どもたちは、初めて出会う仲間たちと距離を縮めることを目的に「なかまづくりゲーム」を行った。最初は緊張した表情で動きもかたく、ぎこちない様子だったが、少しずつ緊張もほぐれていった。ゲーム終了後は、子どもたちが自主的に遊ぶ姿が見られるようになり、その関係を深める良い機会となった。



実技指導「カヌー（安全管理）」 大洲市カヌー協会

午後からは、国立大洲青少年交流の家の代表的なプログラムであるカヌーを体験した。大洲市カヌー協会の講師による指導のもと、カヌーについての基本的な操作方法や基礎知識についての説明があった。実際に乗艇方法について学んだ後、親子でカヌーに挑戦した。今回、初めてカヌーに挑戦する参加者は、思いがけない方向へカヌーが進むなど、苦戦をしていたが、講師の適切なアドバイスもあり、しだいに上達していった。その後、保護者は、安全管理の一環として、沈脱から再乗艇までの方法やスローバックを使っての救助方法を学んだ。

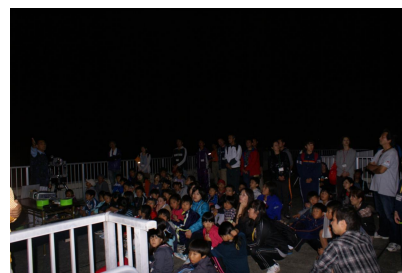


1日目の事業終了時に「カヌーの安全管理講習中、子どもたちは見学が中心で、体験活動が少なかったため、カヌーでの活動をできるようにしてほしい。」という参加者からの要望があった。そこで2回目は、保護者が救助方法等を学ぶ時間は、子どもたちを対象に、上流へのミニツーリングを実施した。子どもの活動時間を十分に確保した結果、子どもが満足できるプログラムとなっただけでなく、保護者も講習に集中できるようになった。

全体を通して、保護者は、危険を伴うプログラムであるカヌーを実際に指導する立場から、カヌーの特性を理解し、真剣に講習に取り組み、その技術を向上させることができた。

「星空観察」 松井康之氏

夜は、松井康之氏による星空観察を実施した。松井氏からは、月や夏から秋にかけての星座の魅力について、分かりやすく興味を引くような内容の解説があった。特に、身近な月や天の川に話が及んだ際には、子どもたちからの大きな反応があった。また、太陽系の仲間である木星についての解説もあった。その後、実際に望遠鏡を使って月や木星の観察を行った。保護者は、このプログラムを通して、簡単な望遠鏡の使い方をなど、星空観察の指導法について詳しく学ぶことができた。2回目は、あいにくの天候となり、予定していた屋外での観察はできなかったが、場所を屋内に変えて、パソコンを使用しているプレゼンテーション形式で講義を行った。前回に引き続き、月や木星、天の川、星座等について大変興味深く、分かりやすい解説があった。実際に、望遠



鏡の使い方等を学ぶことはできなかったが、資料提示の方法や話し方等、詳しく学ぶことができた。

「交流会」 国立大洲青少年交流の家職員

1日目の最終プログラムとして全体での交流会を行った。子どもたちは、開講式の「アイスブレイク」や「なかまづくりゲーム」において互いの距離を縮めることができていたが、参加者同士の交流が少なかったという昨年度の反省を踏まえ、今回は夜に交流会をもつようにした。前半は、国立大洲青少年交流の家の職員が中心となってグループワークゲームを行った。参加者は協力しながら、交流を深めることができていた。また、後半は、翌日行われる野外炊飯の役割分担等を班ごとに話し合った。



【2日目】

（保護者）「教育課程と体験活動の関連性」 荒木俊夫氏

前日に引き続き荒木氏が講義を行った。プレゼンテーション資料を使い、実際に行われた武蔵野市の長期宿泊体験活動を例に、教育課程に体験活動を組み込む方法等について講義していた。保護者は、学習指導要領における体験活動の位置づけを十分に理解できた様子であった。



（子ども）「自然観察・クライミング」 国立大洲青少年交流の家職員・宇和島山岳会

子どもたちは、保護者が講義を受けている間に自然観察とクライミングを行った。まず、国立大洲青少年交流の家職員が、施設内にある野外炊飯場周辺に潜む危険に関する話をした。そして、参加者が、実際の危険箇所や起こりうる事象について話し合った。その結果、野外炊飯を実施する上での危険について意識をしながら準備を行っていた。



野外炊飯の準備終了後、場所をクライミング場に移動し、宇和島山岳会の講師から、基本的なクライミングについての心構え、ハーネスのつけ方や登り方等を実際に学び、その後の親子の活動に備えた。

（実技指導）「クライミング（安全管理）」 宇和島山岳会

宇和島山岳会の講師の指導のもと、クライミングや安全管理についての基礎知識を高め、登り方等の技術を学んだ。人数の関係上、2つの班に分かれて交代しながら活動を行った。1つの班は、保護者が安全管理に関する講義を受講し、その間、子どもは、3mのコースで練習を行った。もう一方の班は、子どもが3つのルートに分かれた8mのコースに挑戦し、その子どもの保護者がクライミングロープの確保者となった。確保が初体験の保護者の安全面に配慮し、その補助として講師が必ず付き添った。



しかし、1回目の事業を実施した際、全員の子どもの8mのコースへの挑戦機会を確保すると、活動時間が足りなくなってしまうという問題が生じた。そこで、2回目は、全体的な開始時間を早めることで、その時間の確保を行った。また、8mのコースを1つ増やし、4つのルートにすることで、子どもが各コースに分散し、十分な活動時間を確保することができた。

全体を通して、保護者は、危険を伴うプログラムであるクライミングを実際に指導する立場から、

クライミングの特性を理解し、真剣に講習に取り組み、その技術の向上をさせ、安全管理面からも理解を深めることができた。

「野外炊飯（媛ポークの丼物）」 国立大洲青少年交流の家職員

最後の体験プログラムは、愛媛県特産の媛ポークを材料とした「媛ポークの丼物作り」である。親子や班で協力して1つのものを作り上げることの大切さを学ぶことを目的として、このプログラムを設定した。野外炊飯場で4～6人の班になって、食材係、火を起こす係、米を研ぐ係、材料を切る係、食器を準備する係等に分かれて、班同士での連携をうまくとりながら、活動することができた。子どもたちも慣れない包丁を使うことや、火おこしにチャレンジしたりするなど、積極的に活動ができていた。また、子どもたちは事前に野外炊飯について学習ができており、保護者にも教える姿が見られた。保護者も指導者という立場から、口や手を出しすぎないように意識しながら、的確なアドバイスができていた。事前に設定していた「協力する」という目的を達成できたプログラムであった。



1回目の事業実施後の反省点として、クライミングの時間が延長してしまい、開始の時間が遅くなり、慌ただしい作業となってしまったことが挙げられる。このことから、2回目は役割分担の徹底や子どもたちの事前学習を内容の濃いものになるように修正した。また、スムーズな作業ができるように、作り方を表記した掲示物やプリントを配布するなどの工夫を行った。その結果、予定の時間内に効果的なプログラムを実施できた。

「閉講式」

主催者である国立大洲青少年交流の家次長が挨拶を行った。その後、自然体験活動の補助指導者として登録される保護者に「修了証」が手渡された。1泊2日のプログラムを終え、修了証を手にした保護者は、これから自然体験活動に関わる者としての自覚を持つことができた様子であった。



11. 参加者の声

参加者のアンケートの結果

【大人】

(1回目)

*満足：60.0% *やや満足：37.1% *やや不満：2.9% *不満：0.0%

(2回目)

*満足：66.7% *やや満足：33.3% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- 体験活動の良さを確認しました。
- リスク管理まで学べたので良かったです。
- 少し時間のゆとりがあれば良かった。
- 時間が押していたが、講師も良い先生で良かった。
- スケジュールがきついと感じた。しかし、また参加したい。
- 本事業の必要性は理解できた。早く全国の小学校に広まってほしいです。
- 体験活動の大切さを改めて実感した。実践者が講師となり、話に具体性があった。
- 体験活動を実際に体験するだけでなく、活動の意義等について講義いただいたことで、大変勉強になりました。

【子ども】

(1回目)

*満足：70.5% *やや満足：27.3% *やや不満：0.0% *不満：2.3%

(2回目)

*満足：78.0% *やや満足：22.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- みんなで楽しむというねらいが素晴らしいです。
- いろんなことができ、楽しかった。先生の話をよく聞いて勉強になった。
- いろいろなことを教えてくださってありがとうございました。
- やったことのないことをやって自分のためになりました。
- 食事や活動がよく、満足だった。もう少し長かったらよかったが、またやりたい。

12. 成果と課題

【成果1】補助指導者として、多くの登録者ができたこと

今回の補助指導者養成研修会は、昨年度に引き続き、親子の事業を行った。事業の実施を2回にするとともに、募集の広報を県下全域の3年生以上の親子に行った。その結果、事業前のねらい通り、多くの保護者の参加を得ることができ、補助指導者として71名の登録があった。このことは大きな成果の1つである。

【成果2】幅広い層の人々に体験活動の魅力を伝えることができたこと

今回の事業では、普段、当施設を利用することが少ない、小学校中学年やその保護者から多くの参加者を得ることができた。また、参加者同士の年齢層を越えた交流も増え、今後当施設を利用して体験活動にチャレンジしたいという声も聞かれた。これは、当施設のような青少年教育施設が、幅広い層の人々に体験活動の魅力を伝えることができたという意味で成果だと考えている。

『課題1』プログラムの内容について

昨年度の課題から、プログラムの精選があった。今回は、そのことを踏まえ、日程やプログラムの作成時に内容の精選を行った。昨年度より、プログラムを減らすことで、内容の充実を図ろうとした。しかし、保護者が講義を受講している間、子どもたちは見学が中心となり活動ができなかった。次年度は、保護者と子どもの活動が分かれる際の子どもの活動内容を事前によく考えておき、子どもにとっても充実した事業となるよう、工夫した。また、昨年度を大きく超える参加者があり、時間内にプログラムを終了させることができず、その後の活動に影響が出てしまったことも反省点である。1回目終了時の反省を踏まえ、2日目に修正を行った部分もあるが、来年度は、更なる修正が必要だと考えている。

『課題2』補助指導者の活用について

昨年度に引き続き補助指導者として多くの保護者の登録があった。しかし、当施設の自然体験に関する事業等での活用ができていないことも課題に挙げられる。今後は、子どもの体験活動を支援する意志のある保護者が、指導者として活躍する場を提供できるよう、工夫を重ねていかなければならない。

